

## 星空と路『東日本大震災 山元町の記録 忘れまじ この悲しみを』上映会アフタートーク

開催日時：2021年3月13日 10:30-11:50

話し手：佐藤修一

進行：水谷仁美（せんだいメディアテーク）

**水谷：**まず私から、この作品を上映するに至った経緯を簡単に説明させていただきます。

「3がつ11にちをわすれないためにセンター（略称：わすれン!）」は、東日本大震災を受けてメディアテークが立ち上げたプロジェクトです。市民、専門家、アーティストなどさまざまな人々が協働して、震災のことを記録しています。このプロジェクトでは、映像編集などの技術の有無にかかわらず、記録活動をしたり、アーカイブ化したり、それらの記録をみなさんと共有したりといった活動の趣旨にご賛同くださる方々に参加者となっていただいております。我々スタッフは、参加者の方々の活動のお手伝いをしたり、このような上映会や展覧会の場などで利活用したりしています。

修一さんが最初にメディアテークに来られたのは2014年でした。同年に修一さんが山元町から仙台市青葉区に引っ越された際、「メディアテークは映像を扱う施設だから、山元町の映像記録を持って行けば何かに使ってもらえるかもしれない」と考え、足を運ばれたとのこと。今日上映した作品の元となる映像素材をたくさん持って来られたので、当時のスタッフが、「すごく貴重な映像だから使わせてほしい」とお話しして、映像の一部や写真などを整理し、「2011年3月11日から5日間の山元町役場の様子」というタイトルで、わすれン!のウェブサイトに記事を掲載させていただきました。

その後はしばらく交流がなかったのですが、2018年に修一さんが「これを上映して欲しい」と一枚のDVDを持って来られました。改めてお話を伺うと「何とかしてみなさんに見ていただきたいと思い、1本の映像にまとめた」とおっしゃるんですね。それが今ご覧いただいた『忘れまじ この悲しみを』です。修一さんは、もともと日常的にビデオカメラで映像を撮られてきた方ですが、編集の技術がなかった。「どんなにたくさん映像を撮っても、編集して1本にまとめないと見てもらえない」と思い至り、なんとビデオクラブで知り合った93歳の木村忠志さんという方に協力してもらって、1本の映像にまとめたということでした。

何としても見てほしい、という修一さんの熱意に感銘を受け、ぜひメディアテークで上映させていただきますとお話をしていたので、本来であれば今年の「星空と路」で上映する予定でしたが、コロナ禍の影響で中止となり、今回やっと上映できました。

以上、説明が長くなってしまいましたが、この映像を何としても見てほしいと思われた理由について、修一さんからお話しいただけますか？

**佐藤：**私は山元町の海岸から 500m ほどのところに住んでおりました。その時、消防の人たちが金切り声を出して、「津波来てるから逃げろー！」叫ぶのを聞き、役場に避難したんです。大変混乱している中で、役目を持った人たちが盛んに動いている様子を見て、ビデオを撮りました。その時は、津波なんか来ないだろうと思っていたものですから、通常通りビデオを持って避難したんです。でも撮り始めたら「津波が見える」という声がして、海のほうを見ると、海岸の防潮林の 3 倍もの高さで白い津波が迫って来ていました。その時は、「ああ、もう駄目だあ……」という感じで撮り続けたわけです。

その後、役場のほうにカメラを移すと、避難してきた人たちが身内の安否を尋ねて集まってきたので、「これはやっぱり記録しておかなければいけないな」と思い、5 日間撮り続けました。映像にあった通り、さまざまな立場の人たちが映っているので、あまり説明をつけないほうが良いのではないかと思います、文字を少し入れる程度の映像になりました。

最初にメディアテークに来たとき、「これは貴重な資料だから後世に残すべきだ」ということで、ウェブサイト上で発信してもらいました。閲覧数や再生数で見た人の数はある程度わかるんですが、何千回と表示されてもどうしてもピンとこないというか、ウェブ公開だけでは足りないのかなと思います、ただの記録ではなく映画風にしたら良いのではないかと、編集してこちらに持参したわけでございます。

この映像でご理解いただけたかはわかりませんが、災害が起こったときの避難所はこのようなものなのだというのを、映像で見てもらいたいと思ったんです。というのは、仙台市内に引っ越したものの、隣の家の人の名前も全然わからなかった。震災から 5、6 年経った頃、何か起きた時のために町内会で名簿をつくらうという話もあったんですが、個人情報だから難しいということで進まなかった。隣の人もわからないような状態で、また災害があったらどうしよう、どうするんだろうという思いがあったんです。山元町で被災した時に、停電でテレビも見られない、携帯も繋がらない、情報がほとんどないという状況を経験したものですから、どうにかしてみんなに映像を見てもらって、震災が起きればどこでもこういうことが起こりうるのだということを感じてもらいたかったんです。

メディアテークさんに上映をお願いしたところ、大きなスクリーンに映してもらえて大変喜んでおります。小さいスクリーンだと何が起きているのかわかりにくいですが、大きな画面ですと一人ひとりの表情もわかるのかなと思いました。

**水谷：**本来ならば災害対策本部というのは役場の中で運営されますが、建物の安全性が確保できないということで屋外に設置された、そういう状況についても皆さんに知ってほしいとおっしゃっていましたね。外に設置されたことで可視化されていた災害対策本部、そしてそこから皆に情報を伝えていたという、そのやりとりを見ていただけたと思います。

先ほど修一さんから伺いましたが、今日は当時山元町の同じ避難所で生活を共にされた方々もたくさんお越しいただいているそうですね。

改めて伺いますが、この映像を今後どんな人に、どのように見てもらいたいのですか？

**佐藤：**震災直後、宮城県内では石巻や気仙沼の被災地の映像ばかりが報道され、山元町のことは置き去りで「陸の孤島」と言われていました。山元町が当時どのような状況にあったか、外に伝わっていなかったんです。映像には、通常は見られないはずの災害対策本部の様子が映っています。屋外での運営は寒くて大変だったと思いますが、そのような中で災害対策本部がどのように動き、避難所を開き、また避難者たちがどう過ごしたかということは、記録して後世に残すべきだと思い、撮り続けました。避難所には、最多の時は3000人ほど避難していました。情報がなく大変な中で、対策本部の方たちが一生懸命情報を流してくださった。これには本当に助けられました。どこの市町村でも同じことが起こり得るので、ぜひそのあたりを見て知ってほしいと思っています。

**水谷：**そもそも災害対策本部がどのように避難所をひらき運営するのかということを私たちはよく知りません。こうした映像記録から、どうやって安否確認を行うのか、情報発信をするのか……張り紙などで情報共有をしていた様子など、改めて細部を知ることができたと思います。

**佐藤：**たぶんこの震災を経験して、各地の対策本部における活動記録が、文字で記録されていると思うんです。ただ、文字だけを見てすぐに思い出したりイメージできるかということ、なかなか難しいと思います。映像から得られる教訓を、どの市町村の方にもぜひ参考にしてもらえればと思っています。

**水谷：**修一さんはこの映像を「いい面だけではなく反省点も含めて今後役に立てて欲しい」とよくおっしゃっていますね。映像を見ながら、災害時にどう動けるかを皆で話し合うワークショップを行うなど、防災学習にも役立ててもらえるといいですね。この映像はDVDとして、現在メディアテーク2階の映像音響ライブラリーで貸出しております。防災学習や震災学習にぜひご活用いただければと思います。